

---

# 植物園のあるじさま

城沢奈々留

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

植物園のあるじさま

### 【Nコード】

N6197S

### 【作者名】

城沢奈々留

### 【あらすじ】

突然異世界で目覚めた主人公、園崎麻は草木を愛するごくごく普通の高校生。異世界に呼ばれた割には身体が強くなったわけでもなく、魔力や能力も芽生えなかったが、彼には前の世界から受け継いだ植物に好かれるという奇妙な体質があった。

## 前書き

この小説に関しての注意書きなどを。

この小説は作者が気軽に更新することを考えて作られているので、あまり難しい設定は出さないつもりです。

また本文も少なく、一部につき大体千文字前後を予定しています。ただある程度の量がたまったら、それらを加筆などしてまとめる予定です。

若干エロい描写があります。

更新速度は不定期です。他の小説を書くのに行き詰ったり、気分を変えたいときに更新します。

それでもよろしければどうぞお付き合いくださいませ。

俺が目覚めた場所は、見知らぬ小屋だった。

気付いたのは数分前。

意識が戻った俺は、二度寝するべく布団を引っ張ろうとした。

掴んだ布団から使い慣れた布団とは違うにおいがした。

そのにおいに寝ぼけていた意識がはっと覚醒する。

視線を落として見ると服も違う。素材の分からない不思議な服を着せられていた。

少しごわごわしているが、作りは洋服とそこまで変わらないようだ（ちなみに長袖である）。

上半身を起こし、周囲を見渡す。

この場所は木材で組まれたログハウスのようだ。

八畳くらいの部屋には、俺が寝ているベッド、木製の机と椅子くらいしか置かれていない。

布団を押しつけて、床の上に立った。

あ、パンツはいてない。

シャツもなかった。何だろう、サイズが合わなかったとかかな。ぺたぺたと裸足で歩いてみる。

ごわごわした服は肌に合わず、擦れあう感じだった。

ひとしきり歩いた後、ベッドに腰掛けてみた。

ベッドの対面には扉があったが下手に外に出ていいものかと考えた結果、先送りすることにした。

ベッドの上でごろごろ。

妙に身体が疲れていたもので、考えるのは後にして休むことにした。

少なくとも今すぐ危険というわけではなさそうだし。

硬い枕と布団だけど、疲れた身体には十分すぎる。

そうやってしばらくごろごろしていると、部屋の扉が開いた。やってきたのはおじいさんだった。白髪で、ひげもたつぷり蓄えていた。

大魔法使いみたいな感じ。どこかの魔法学校の校長とかやっていそうなイメージだ。

寝転がったまま対応するのも問題だと思ったので、俺は起き上がり、ベッドの上に座った。

「？」

何か話しているのは分かるけど、内容はまったく分からなかった。

「ええっと……すみません、言葉が分かんないんですけど」

俺が困ったように言うと、おじいさんは顎に手を当ててなにやら考えているご様子。

はっと何かに気付いたおじいさんは、俺の額に人差し指を伸ばすと、何やらぶつぶつとしゃべりはじめた。

魔法でも唱えているのかと思ったら、本当に魔法を唱えていたらしい。

知らない言語の知識が頭の中にどんどん流れ込んでくる。

俺はされるがままだった。

次第に流れ込んでくる知識量が少なくなる。

最後の知識の一滴がぼたんと落ちた。

不思議なことに、自分の知識の中に知らない言語と文字が存在していた。

「ふむ。これでわかるかな」

「え、はい」

俺は自分が出した声に驚く。明らかに日本語じゃなかった。

かといって何語といわれても……あれ？ カルド語というらしい。頭の中の知識が答えてくれた。

一般常識レベルの知識もついてきてきたらしい。魔法すげえ。

「さて、突然ですまないが君はどこから来たのかな。カルド語が通じないとなると、余程田舎からだと思うのだが」

知識を参照して、カルド語を調べる。

どうやら世界共通の言語のようで、余程の田舎でない限りは使われていないという。

俺は少し迷ったが、正直に話してみることにした。

知識を参照した結果、どうやらこの世界は俺が暮らしていた世界とは違う世界らしいと理解できた。

なにせ俺が今まで高校生として集めてきた知識と先ほど得た知識がまったく繋がらない。

そのことを話すかどうか迷う。頭の中にはこの世界の基本知識が詰め込まれているので、ごまかすことも出来るだろう。

だけど俺としてはこのおじいさんに嘘をつくより、協力してもらったほうがいいと思った。

俺はおじいさんの目を見て、正直に話すことにした。

「……その。実は俺、異世界から来たんです」

俺は今まで起こったことを思い出しながら、おじいさんに話していた。

高校から帰り、宿題をやるうとした。

ただつつい眠くなって布団にもぐりこみ、ちょっとだけ寝ようと考えて、三十分後に携帯電話のアラームをセットしたところまでは覚えている。

そして今に至るのだが。

「ふむ……なるほどそういうことか」

おじいさんは何やら納得している様子。

俺が不思議そうにしていると、おじいさんは俺がこの世界に来た現場を直接目撃したらしい。

こちらの世界には異世界を渡るとい魔法は伝えられていないらしいけど、瞬間移動のような魔法は存在しているみたいだ。

おじいさんは移動魔法を感じ取り、警戒した。

敵かと思つて臨戦態勢を整えていたところに、現れたのは見知らぬ男、つまり俺。

おじいさんは見た目通りの魔法使い。しかも頭に大がつくほど優秀な魔法使いらしい。

有名な魔法使いなので、利用しようとするものも多かったらしいが、地面に放り出されたまま動かなかった俺を見て、自分から跳んできたのではなく、何らかの原因で跳ばされたのだと判断したらしい。

いやーその判断は正しかった。

実際俺もわけ分からんまま飛ばされたしね。

それで気を失ったままの俺をおじいさんは自分の家に運んで介抱してくれた。

俺が出現した日の前に丁度雨が振っていたみたいで、地面は泥だ

らけだつたみたい。

服は洗濯して今乾かしてくれていて、この服はおじいさんの息子が着ていた服らしい。

気になって下着は？ と聞いたら普通の人は下着はかないんだつてさ。

ノーパン異世界つて何さ。

あ、でも地位の高い人は下着つけるらしい。貴族とか王族とか。貴族や王族が自分の身分を証明するために下着を見せたりすることもあるとか。勿論みんなの前で見せつける、なんていう露出狂みみたいなことをするわけじゃなくて、同性の下着検査官なるものが存在してるという。

おじいさんは俺が下着を着ていたので、もしかしたら貴族の人かもと考えていたらしい。

「で、やっぱり異世界を渡る魔法っていうのは存在しないんですよね？」

「すまん。大魔法使いと呼ばれた私ですら見当もつかん」

だとしたら俺、この世界で生きていくしかないよな。

一般市民として生きるためには、俺もノーパンに慣れないといけないのだろうか。鬱だ。

002 (後書き)

確かそんな設定のエロゲありましたよね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6197s/>

---

植物園のあるじさま

2011年4月21日02時40分発行